

東亜同文書院大学から愛知大学へ

東亜同文書院大学記念センター長 馬場 毅

東亜同文書院大学記念センターのセンター長を務めております馬場と申します。よろしくお願ひ致します。今大城先生からご自分のご経験に基づいて東亜同文書院がダイナミズムに富んでいたとか、従軍通訳、これは従来よく分からなかったんですけども、従軍されたときの話、それから上海の雰囲気、まさに「事実は小説よりも奇なり」と言いますけれども、大変迫力に富んだ話の後で、私としては非常に話しづらい状況の中で東亜同文書院のことについてお話をさせていただきます。もしかしたら若干時間がオーバーするかもしれませんがご了承くださいたいと思います。

最初に東亜同文書院が出来るまでということで、キーパーソンが何人かいるわけですけども、一人が岸田吟香。彼は幕末、へボンから英語を学び、上海に渡って『和英辞林集成』という辞書を翻訳・刊行しております。当時日本で印刷ができないということで上海に渡ったというふうに聞いております。その後、目薬をへボン、これは年配の方ならかつてローマ字表記にへボン式があったのをご存知かもしれませんが、そのへボンさんですね。彼から英語と目薬を学んできました。また上海に「楽善堂」というのを作ります。これは目薬と本の販売を中国ですするという、日本人初の中国実業家ということになります。

それから二人目は荒尾精であります。彼は 1886 年に訪中して、陸軍中尉でありながら、岸田吟香を頼って、岸田が開きました漢口楽善堂を任せられます。同時に同志に中国の実情調査をさせます。そして「日清貿易研究所」を 1890 年に上海に作ります。その性格はまさにビジネススクールと言っていると思います。学生に中国語をマスターさせて商慣習を体験させ、中国人の買辦、この買辦というのはアヘン戦争以後ですね、欧米人が中国に出て

きたときに、彼らは中国の商慣習が分からないので中国人を雇って商売をしていた。それを買辦と言っておりますけれど、実は日清貿易研究所はこの中国人の買辦を用いないで、日本人が自らですね、直接中国人とビジネスをやっていくという非常に壮大な目的を、養成の目的として据えていました。同時に、この後に三人目のキーパーソンである根津一が日清貿易研究所に参加していくのです。それでこのような中国の実情調査をもとにして、荒尾精が根津一に『清国通商総覧』という、これは近代日本における中国の商慣行についての最初の本だと思えます。非常に厚い本です。それを書かせた。

四人目は東亜同文会の初代会長となりました近衛篤磨です。号が霞山と言いますので現在東亜同文会の実質的な継承団体が霞山会と名乗っています。東京の霞が関に建物を構えております。衆議院議長でもあったというのが近衛篤磨です。

東亜会と同文会とが一緒になったんですけども、日清戦争の後ですね、列強による中国分割、例えば山東省はドイツが、ロシアが北部満州、日本が南満州、さらには台湾、福建。それからイギリスがですね、先ほど大城先生は揚子江とおっしゃっておいりましたけれども、長江流域。フランスがインドシナ半島と陸続きの広西省と広東省というふうに分割の動きが出てきます。それから日本国内ではですね、朝鮮をそろそろ植民地化しようとしている時期でありまして、ロシアにとられちゃうと困るということでですね、ロシアの脅威が非常に増大していたと感じていました。

そういう中で、一つは東亜会なのですが、東亜会に参加したのは陸羯南、ジャーナリストで有名ですが、それから三宅雪嶺、それから荒尾精の弟子でありました井上雅二、それから梁啓超もですね、

1898年に中国の改革運動である戊戌変法が失敗した後、東亜会関係者も関与して日本に亡命させました。その梁啓超も東亜会に参加し、その他、後に孫文の支援者となる犬養毅、それから宮崎滔天、それから右翼黒龍会の内田良平、その他平山周などが参加しました。東亜会はどちらかというと中国の変法派による改革運動家、あるいは孫文による革命運動家と、後に分かれますけれども、どちらにしても中国の改革運動を支援する、そういう人たちが多くいました。もう一つは同文会でありまして、近衛篤磨の他に宗方小太郎、これは荒尾精の系統の漢口の樂善堂、それから同じく白岩龍平。これは後に実業家として大変有名になります。それから先ほどの目薬を売ったりしていた岸田吟香、大内暢三といった方が同文会に参加しておりました。彼らは中国との商業活動に携わった実務派が多い。東亜会が中国に働きかけて改革をやろうというのに対して、こういう特色があったと思います。そしてこの両者が1898年に合併しました。それが東亜同文会という、東亜同文書院の経営母体なのです。会長は近衛篤磨がなりまして、幹事長は東亜会の系統の陸羯南がなりました。

それで当時の言葉ですので支那という言葉を使わせていただきますけれども、「中国を保全する」、「支那及び朝鮮の改善を保全す」ということを掲げております。分割を阻止するということを明らかにしています。それから梁啓超の扱いなのですけど、結局会友となって正式な会員になりませんでした。でその点は言わば中国の改革運動を推し進めるといふグループと一線を画しておりました。同時に東亜同文会は明らかに清朝体制の維持を明確にしておりました。総体として、孫文のグループを支援するというはやっておりません。ただし、東亜同文書院出身者の中には孫文の革命を支援した方というのはかなりおりますけれども。

東亜同文会の最も力を入れたのは教育文化事業でありまして、それが上海の東亜同文書院のもとになります南京の同文書院です。これが出来るときに、近衛会長がですね、当時清朝の高級官僚であった劉坤一、上海から南京の江蘇省を支配していたのが両江総督ですけども、この方と会見してその援助を得ます。そのため日本の教育機関で

あるにもかかわらず、東亜同文書院は租界の外に敷地を確保をして、それが最後まで続くこととなります。つまりこれは劉坤一の配慮があったからだと思います。そして根津一が院長となります。ただし、1900年に義和団事件が起きて、彼らは清を助けて洋人つまり外国人を滅ぼすという、非常に排外主義的なグループですが、後に清朝は宣戦布告を八カ国連合軍にして華北は戦争状態になります。その動きが南京に及んできたためにこの南京の同文書院は、上海の東亜同文書院に併合されます。それが1901年です。

ただその前にですね、実はですね、東亜同文会は、日本人の学生の教育は東亜同文書院、もう一つ、中国人の学生の教育というのに大変力を注いだ。それを担ったのが、東京同文書院です。当時大量に中国人留学生が日本に来ます。これは日清戦争の後から増えつつあるのですけれども、義和団の時期に一時途切れます。ところでなぜ来たのかというと、日本がいち早く近代化に成功をして欧米の文化を取り入れた。中国も改革をやったけれど、小国日本に負けてしまったということで、日本をモデルにして国の改革をやっていくという風潮が起きて、これは有史以来初めてだと思うんですけど、中国人にとって日本が改革のモデルになったということです。で、その留学生を教育するために東京同文書院という、これはあまり知られてないのですがこれが作られます。何度か引っ越しをして4度目の校舎がですね、北豊島郡、現在の新宿区の下落合という、ちょっとマイナーなお話をして恐縮でございますけれども、西武新宿線という東京の私鉄の高田馬場の次の駅ですね、そこに校舎を建築したと。これは日本の高等専門学校などに進む予備学校だとかたちでありまして、旧制中学の学力を彼らに教えるところです。で、日本語と普通学を教えると言ってありますが、普通学とは何かといいますと、理科とか、数学とかですね、物理とか、そういうのを教えている。それから中国では珍しく体育も教えています。

この時に派遣されてきたのがですね、張之洞という高級官僚により派遣された。張は近衛と大変関係が深い人でございまして、そもそも東京同文書院のはじまりは張之洞の孫が学習院に留学をし

す。近衛が衆議院の議長の官舎に彼を收容します。ですが一人ならば大丈夫ですけれど、大量に来るともう收容できないということで東京同文書院を作った。それで、この張之洞が派遣した留学生と、東文学堂というのがありまして、これは東亜同文会の関係者で中島真雄という人物が福建省で作った日本語の学校です。で、そこから派遣された人間がやってきました。この東京同文書院の特色として、この時期大変多くのこのような学校が日本に作られますけれども、東京同文書院の特色として、清国のエリート層が大量に入ってきた。で後に中堅層、1905年前後から入ってきた。1914年までに中国人留学生が3,000名入学しています。

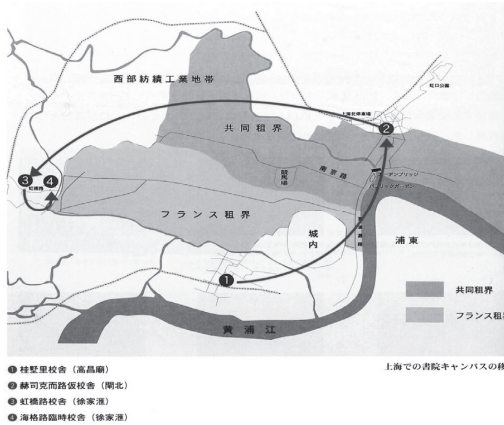
1915年に日本が21か条要求を出して、その内容は例えば、日本が占領したドイツの利権を日本が継承するとか、山東鉄道を支配するとか、あるいは旅順・大連がある遼東半島を、当時25年の租借期限を99年間にしようという、これはイギリスが香港でやったことをですね、あれの真似をしたというがあって大反発を受ける。それから1919年にはヴェルサイユ条約によって山東の利権が中国に返還しないで日本が継承するというので、5月4日学生達が日本に対して大規模な抗議運動を始める。この時期も実は日本商品ボイコットが、今と同じですけど日本商品ボイコットやっております。で、この21か条と1919年の五四運動以降、留学生が激減しますので、結局22年に閉校致します。

ただし、ベトナムの留学生を辛亥革命前に受け入れたということがあります。この独立運動の中で大変有名なファン・ボイ・チャウ(潘佩珠)という人物が起こした東遊運動、これはベトナム独立運動の活動家を日本へ留学させる運動ですが、それを東京同文書院で引き受けて教育をしたという事実があります。そもそもファン・ボイ・チャウは、横浜で梁啓超に会って、ベトナム側が日本からの武器援助と、軍事訓練を受けさせてほしいということを言うんですが、梁啓超に諭されました。日本はフランスとの関係があったものですから、それはやはり受け入れられない。その代わり大隈重信、犬養毅が東京同文書院の副院長でありました柏原文太郎に関与させてですね、東京同文書院で引き受けることになりました。当時日本にはファン・ボイ・チャウの

他に阮朝の王族である畿外侯クオン・デが来日しまして、独立運動の中心だった。1908年が最盛期だと思われます。この時、東京同文書院は60名を入学させていますが、ただし清国人と称しています。これは日本政府とフランス政府を配慮してだと思います。日本政府はですね、1907年に日仏協約を結んで、これは簡単に言いますと、フランスは日本の朝鮮の統治ということについて黙認するけれども、日本もフランスのインドシナ半島の統治について、これを認めるという内容ですね。で、フランス政府はこのクオン・デとファン・ボイ・チャウを国外退去させようと要求するのです。日本政府もそれで必死になって探すんですけども、1908年5月、ファン・ボイ・チャウが東京から突然行方不明になるんです。それが12月に出てくるんですけども、これは日本の警察の報告によると東京同文書院の宿舎にかくまったというふうになっています。私は東京同文書院がですね、ファン・ボイ・チャウを含めてベトナム人の独立運動家を支援したと考えています。日本政府の方針に反してですね。これを私は大変評価すべきことだというふうに思います。で、実は先日2月7日、NHKの方が本センターにいらっしやましてですね、今年は日本とベトナムが戦後国交を結んで40周年なので、日本とベトナムの両方で、ファン・ボイ・チャウの東遊運動についてドキュメントを作ると。したがって東京同文書院について資料が東亜同文書院大学記念センターにあるかということで調査されました。東亜同文会および東京同文書院は、ベトナムの留学生については一切記録を残していません。それを私は日本政府とフランス政府に対する配慮だと思っています。ただし、後に彼らの回想録には東京同文書院のことが明らかに出てきているんです。ファン・ボイ・チャウの回想録にも出ております。今ベトナム側がですね、このファン・ボイ・チャウの東遊運動を大変評価しており、日本政府の方針によって国外追放されたけれども、評価をしているというふうにNHKの方から聞いております。でも結局、1909年に国外追放されて挫折をしていきますが、これもまた東京同文書院中国人留学生受け入れのもう一つの側面でもあります。

そして、次に本題である東亜同文書院なのです

けれども、初代院長は根津一なのですけれども、先ほどの荒尾精の作りました日清貿易研究所のカリキュラムが基本になりまして、中国人の商売を助ける買辦を用いず、直に日本人が中国との貿易を行うという、そういう貿易実務を学ぶ専門学校として作られます。で、先ほどの両江総督劉坤一が敷地を提供したこともあって外国人租界外に作られます。



最初は、高昌廟桂墅里路校舎です。後に 1913 年、これは孫文が袁世凱の独裁に反対して起こした第 2 革命の余波を受けて焼失しております。これがですね、先ほどの大城先生がいらっしゃったときは 4 番目というところなのですが、1 番目のところ、これが最初の頃です。焼かれて仮校舎のところにできて 3 番目が後で出てきますけれども、虹橋路にありました。4 番目、これが大城先生が留学されたところ。上海交通大学のキャンパスを借ります。先ほど出てきましたように、ここに共同租界があり、こっちはフランス租界です。キャンパスは全て租界の外に作られております。これが同文書院の特色かと思えます。つまり外国の主権下に置かれていないところで作られたということです。またこれが東亜同文書院のスタッフ一覧で、1908 年ではどのようなことを教えていたかということですが、法律、経済、商業、あとは英語と中国語というかたちがカリキュラムとしてあり、貿易実務家を養成することが明確に表れているかと思えます。で、それから 4 点にわたって東亜同文書院の特色に沿って簡単にご説明をさせていただきます。

第 1 に、経営母体の東亜同文書院のアジア主義的性格を体現していたという点です。明治維新

以後、日本政府は「脱亜入欧」を掲げておりますけれども、東亜同文会は、「支那保全」論にみられますように列強による中国の分割に反対します。東亜同文書院の開校時の『創立東亜同文書院要領』の「興学要旨」も東亜同文会の主旨を受けて、「中外ノ実学ヲ講ジテ、中日ノ英オヲ教エ、一ニハ以テ中国富強ノ基ヲ樹テ、一ニハ以テ中日輯協ノ根ヲ固ム。期スル所ハ中国ヲ保全シテ、東亜久安ノ策ヲ定メ、宇内永和ノ計ヲ立ツルニ在リ」とあります。実学を学んで、日本人だけではなく中国人の人材養成も行って、そして中国の富強を経済的に豊かになる基礎を固めて、日中提携して列強からの東亜保全を目的とする。その段階ですでに日本は台湾を植民地化しているのですけれども、例の三国干渉の時に抗し得なかったように、日本は弱小国であります。その点分割の危機をむかえていた中国と共通の状況であったと思います。でその時点で東亜同文書院の掲げた日中連携の理念は現実的実現の可能性を持っていたというふうに思います。しかし、日露戦争後の列強化・帝国主義化による日本と中国の状況に相違ができ、また先ほど言いました 1915 年 21 か条要求以後の対中侵略の展開、それと対中関係の緊張化で、そのために日中連携の現実的可能性は徐々に失われていきました。しかしそれは大状況なのであって、だけど東亜同文会はその時期にあっても日中連携というのを考えていましたし、中国人学生の教育を断固継続している。そこを私はやはり言いたいと思います。

それから第 2、現地主義と実用主義です。中国との貿易を担う人材養成のために、日本の教育機関にも関わらず、中国の現地で教育をしたと。しかも租界の外に学校を置いたと。先ほど大城先生から中国語を学びましたというご説明がありましたけれども、日本語で読む明治の漢文文化が非常に盛んだった時に、外国の言語として中国語を学ばせる。これは特色だったと思います。さらにカリキュラムにおいて、先ほどカリキュラムにおいてちょっとご紹介しましたけれど、貿易実務に関連することを重視しました。これが実用主義です。

それから第 3、社会調査ということがありまして、大旅行ですね。これは大変特色あることだと思うの

ですけれど、元々の最初のきっかけはイギリス側の要求がありまして、つまり1902年の日英同盟後、イギリス政府からロシアの西域、すなわち現在の新疆ウイグル自治区かつてのシルクロード、および東部蒙古への進出に対しての調査依頼が、日本の外務省にあり、その外務省の依頼を受けた根津院長が1905年から1906年にかけて5人を派遣して、そして報告書を出したことから始まります。これはさきほど1907年と話が出たと思いますけれど、1907年以後、外務省から清国調査旅行補助費としてお金が入ってくるようになります。このお金が元となって1907年以後ですね、東亜同文書院はこれから独自の大旅行調査を始めていきます。ただし外務省の資金はその後一部入ってくるようになりますが、で、1905年の調査は、国家の依頼による調査に対して、これは東亜同文書院独自の中国各地に対する社会調査となって続いたということでございます。そしてこの大旅行をもとにして卒業論文を書きました。今の学生は大変便利な世の中にいますが、当時の学生は大体数人あるいは5、6人で一班を編制し、ライカのカメラを1つ持って農村を歩いた。自動車はもちろん普及していませんし、馬車を用いたり、歩いて移動し、5月から8、9月にかけて社会調査を行っていますが、その調査の対象は、初めは中国の商取引であったが、その後さまざまな地域調査に拡大していきます。特に、指導者として経済地理学を専攻していた馬場敏太郎の功績が大きい。後に、支那研究部が設立されると、これが学生の調査旅行を指導することになりました。これが先ほどの藤田佳久先生がお作りになった地図です。1905年から1923年までのコース図であります。黒く塗ったところは何回も行ったところで、中国のほとんどの地域を徒歩や馬車などで歩いて行ったことがお分かりになったと思います。で、どんな格好をしているかというと、こんな格好をしています。かつてのアフリカ探検隊の様ですが、こんな恰好していると外国人かどうかすぐ分かってしまう。中国側はそれに対してどう反応したかというと、清朝政府および中華民国政府は、執照(許可証)を政府が発行し、そこには学生達の訪問先が書いてあって、学生たちはこの執照を持ってですね、県にいる知



県、県長。知県というのは清代の言い方ですが、事前に連絡していて、学生はそこに行くときまず県長にあいさつに行って許可を得た。そうすると、治安が悪いので県長の中には書院生のために兵隊を護衛につけたところもあった。当時の中国は大変治安は悪いんです。例えば土匪というのは武器を持った強盗集団でございまして、これが農村各地に出没している。だから兵士が護衛のためについてくるのですけれども、さらに、辛亥革命や国民革命等々、内戦が各地で起きていますけれども、結局1人の事故なくこの調査旅行が行われました。ただし、満洲事変が始まりますと、中華民国政府は執照を出さなかったもので、そのため学生達の調査先の多くが満州となりました。そして、調査旅行をもとにして各地の報告書、『支那経済全書』等が出ております。『支那省別全誌』は各省ごとに出されておりますけれども、各省の状況を



学生たちが足で集めた資料をもとにして書かれている貴重なものでして、戦後も復刊しております。台湾から海賊版が出ております。その他、東亜同文会の雑誌として、『東亜持論』からはじまってですね、『支那』あるいは『支那研究』から『東亜研究』まで、ご覧いただけるかと思います。

それから第 4、日中提携を目的とした中国人人材の育成ということで、これが先ほどの東京同文書院。その後日本に来る留学生が少なくなって来たことから、なら上海現地で中国人を教えようとして、1918 年に、東亜同文書院内部に中華学生部を作ります。その時の校舎が徐家匯虹橋路校舎です。これは残念ながら日中戦争が始まった時に中国軍に焼かれましたので、現在は残っておりません。ここに中国人を含めて宿舎に住んでいました。ただし 1920 年代はものすごい排日運動が起きた時期でありますので、大体 400 名ほど入学するんですけども、卒業したのはわずか 50 名です。1925 年、五三〇運動が、これは直接的にはイギリスが対象ですが、最初は青島の日本紡績工場でストライキが起これ、それが上海に飛び火したときにですね、共同租界の管轄権をイギリスが持っていて、イギリス警察が発砲したために反日から反英に変わります。このときにはですね中華学生部の中にも、いわば中国側に呼応して学生ストに参加したものもいる。例えば梅電龍(梅龔彬)ですが、当時、第一次国共合作のもとで国民党と共産党に関与していた二重党員ですが、これに参加している。また 1928 年 5 月、国民革命軍と日本軍とが衝突した済南事件が発生し、その時、上海学生連合会は反日委員会を組織し、中華学生部に 10 日間のストライキをすることを要求したのです。

それからこの時の中華学生部長がですね、坂本義和さんという東大で教えていた政治学者のお父さん、第一期の東亜同文書院の卒業生で坂本義孝という方がいるのですが、日本領事警察が中国人の左翼学生を捕まえるのです。その時、坂本義孝さんが学生をもらい下げに行ったときに日本の領事館や憲兵隊に「おまえはそれでも日本人か」と怒鳴りつけられるのですが、それでも身を守ったという話があります。助けられた人は後に、日本が戦争に負けたとき、坂本さんは上海にいたのですけ

れど敗戦国民としてみんな国民政府軍が上海に入ってくるのを見ているときにですね、国民政府軍の将校が坂本義孝さんを見て下馬し、「私は先生に助けられた」という話を坂本さんにしております。戦争中、あるいは日中戦争を経ているんですけども、そういう反日運動が起きた中でこういう方がいるということは特筆すべきことなのかと思います。先ほど東京同文書院のベトナム人留学生のときもそうですけれども。

それから日本人学生の中にも左翼学生が出現します。この点はもう時間が過ぎておりますのでできるだけ簡単に言いますけれども。当時日本人でも中国にいて中国共産党の組織に入っていました。共青团というのが、今も共青团というのはありますけれども、共青团の書院支部ができております。ただ、1933 年 3 月、領事館警察が書院学生の寮を急襲し、結局壊滅しましてそれ以後この支部は作られません。ただし先ほどの大城先生の話にありましたように書院が本土に比べて最後まで自由な雰囲気がありました。ただ結局は中華学生部の学生は満洲事変以後次々に退学していくものですから、1934 年に廃止されます。この時期は、日中の大きな枠組みから言うと、日中連携という可能性が非常に薄いのですけれども、にもかかわらずこの時期にも追求していた。これは私は大変貴重な実践であったというふうに思っております。しかも中華学生部は、排日運動の拠点だったんです。、中国の警察が入ってこれない。日本の領事館警察は入ってこれませんが。

あとですね、簡単に日中戦争後のお話をします。先ほど通訳従軍の話がありました。これは大城先生もお話しされておりますので、繰り返しません。大変学生たちがショックを受けたと言われております。それから先ほどの虹橋路の校舎が中国兵士により放火されている。これはもう日中戦争始まって以後です。そして大城先生が留学されていた時には上海交通大学の校舎を借用しておりました。最後の学生は上海に行けなくて、富山市の呉羽航空機株式会社(旧呉羽紡)の校舎に留学しております。去年富山で講演した時に呉羽の校舎はすでもうこわされておりましたけれども。その後について、あとは本当に簡単に。日本敗戦の後上海の校

舎は中国側に接収されます。東亜同文書院大学は閉校となります。それから近衛篤磨の子ども、文麿はGHQによって戦犯に指名されて東亜同文書の建物もGHQに占拠され、解散します。その後、東亜同文書院大学の教員や学生、それから台北の帝大、京城の帝大の教員等によりですね、予備士官学校があった愛知県豊橋市、軍隊がなくなってしまいましたから、敷地があって校舎の代わりにもなりますから、そこに愛知大学を創立いたします。ただしGHQがですね、東亜同文書院大学を復活することはまかりならないと言ったものですから、別個の大学として作られますが、2代目および4代目の本間学長はこの東亜同文書院の最後の学長でありまして、それから学生、教員も非常に東亜同文書院の関係者が多いこともあり、やはり後継校かと言えます。現在の東亜同文書院大学記念センターなのですが、かつては愛知大学の本館でありました。木造の建物です。



それから特に卒業生の方々がですね、戦争中、先ほども大城先生の話もありましたけれども、心ならずも学徒動員され各地の部隊に入営せざるを得なかったことから、戦後、彼らの多くは様々な分野で日中友好の架け橋となるような活躍をいらっしゃいます。同時に愛知大学も「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」、さらに「地域社会への貢献」を掲げた。とりわけ、『中日大辞典』をはじめ、中国研究に一つの重点を置いているということでございます。

最後にですね、4点申し上げましたけれども、東アジア共同体、鳩山元首相が言うておりましたけれども、いずれ私は東アジアにおいては実現しようという道もまた出てくる可能性があると考えていま

す。その中で、①アジア主義的性格、②現地主義と実用主義、③1905年から先駆的に行った社会調査、中国を対象にしてこんなにも細かくやったことがない。欧米でもない。それから、④日中連携を目的とした中国人人材の育成、こういう4点を特色とした、東亜同文書院の先駆的な実践は、私は教育の面だけではなくて、アジアの世紀といわれる現在、日本のアジアへの向き合い方で、今でも大きなヒントを与えていると思います。例えば一例あげます。最近学生が海外へ留学するのが大変少なくなっております。大変危惧しております。東亜同文書院の学生は全員、上海に向かって、そこで上海で色々な実態を知って中国語を学んだんですけども、そのような経験の一つとっても、大いに学ぶ必要があるのではないかというふうに思います。以上、時間が過ぎて大変恐縮でございます。最後までお残りいただいて大変感謝を申し上げます。どうもご清聴感謝いたします。